

ひまわり訪問看護ステーション 矢本サテライト

症 例 概 要 60台 男 性 要支援2

利用期間：R4 年 12月 ～

経 過 H25年頃突発性拡張型心筋症と診断される。H30年に10月に心不全発症し、同月にCRT-D（植込み型除細動器）を留置したが、その後も心不全を繰り返し重症心不全の診断。R2年10月に埋め込み型心臓装置装着（VAD）となる。その後ドライブラインの刺入部の感染を繰り返していた。R5年に介護保険対応年齢になり病院の勧めもあり訪問看護導入になる。

内 容

週3回訪問しているが、現在に至るまでの経緯は決して容易ではなかった。

VAD挿入時、妻はICUで多くのラインに繋がれている夫を見て、命の危機を目の当たりにしたと話す。急性期を脱しても、VADのドライブライン刺入部の不良肉芽の形成があり、感染の為、入退院を繰り返していた。R5年5月ドライブライン刺入部処置のため訪問開始になる。介護保険制度や訪問看護の仕組みもよく分からず、介入に消極的であった。その為、刺入部の観察さえ断られる事もあり、感染を繰り返し在宅期間は長くとも1ヵ月程度の日々が続いた。2～3回の訪問後に長期の入院になる日々が続き、R5年10月から再度入院管理となり、プロントザン（抗菌成分ポリヘキサニド配合剤）を使用し処置する事が決まった。退院後も処置継続の依頼を受けたが、在宅での使用頻度が低いゆえ、断る事業所が多いとの情報があり、入院中のご本人から「受けてほしい。」と直接依頼あり。快諾と共に病院に連絡し、処置の方法を病院にて直接共有した。

R6年4月に退院し、自宅で週3回プロントザン処置実施。不良肉芽の悪化なく、その後プロントザン処置は終了し現在は消毒のみで同頻度で継続訪問中である。

ご本人、妻共に性格は明朗活発であり、疾患やそれによる制限に対しても前向きである。

今年は「3年ぶりに家でお正月を過ごしたの。訪問看護さんのお陰です。訪問続けてね。」という訪問看護冥利につくお言葉を頂戴した。

プロントザン処置開始後は再入院なく、最長の期間自宅で過ごしている。

始めは訪問看護への信頼が希薄であったが、入院先まで足を運び処置の共有を行なった事、再入院なく自宅で過ごす期間が、訪問看護への信頼にも直結していると考ええる。

現在、趣味の木工細工や旅行、養蜂を楽しんでいる。訪問時にスタッフと冗談を言って笑顔が溢れる時間となっている。このように前向きでキラキラした在宅生活がさらに続くよう支援に励みたい。